

開催報告「2019 Sakura-Bio Meeting」

加藤 竜也

日本生物工学会中部支部では、3月30日（土）から31日（日）にかけて、名古屋大学創薬科学研究館2階にて国際シンポジウム「2019 Sakura-Bio Meeting」を開催いたしました。現在国内の留学生および外国人研究員や外国人教員に関して、生物工学会大会など国内学会での発表をする機会はあるが、英語での発表のため、研究成果に対する議論が活発に行われていないことがよく見受けられます。そのため、「留学生に対し、もっと研究成果の発表・議論の場を増やしたい、日本人学生にも英語での発表・討論の機会を与えたい」という中野秀雄前中部支部長の強い思いから、今回初めて開催されることになりました。シンポジウムから交流会まですべて英語で行いました。E-コインというものを発行し、日本語を使用した場合このE-コインをやり取りして、一番日本語を使用しなかったとされる参加者に賞を与えるという新しい試みもあり、一味違ったシンポジウムになりました。

Keynote lectureとして、1日目にはDong-Myung Kim氏（韓国忠南大）の「Cell-free synthesis, harnessing the biosynthetic machinery without boundaries」として無細胞タンパク質合成系の講演、2日目はAlice Vrielink氏（西オーストラリア大）の「Combating antibiotic resistance. Structural, biophysical and inhibitor design studies of a colistin resistance enzyme involved in endotoxin modification」



図1. Keynote lectureの様子

としてコリスチン耐性に関与するEptAホモログ解析の講演がありました。またInvited lectureとして、1日目には古賀雄一氏（大阪大）の「Protein engineering on a Subtilisin-like protease from a hyper-thermophilic archaeon and its application」と加藤竜司氏（名古屋大）の「Image-based non-invasive quality evaluation for regenerative medicine products」、2日目には加藤晃代氏（iBody株式会社）の「Ecobody technology: a rapid and robust monoclonal antibody screening method from single B cells using cell-free protein synthesis」と有川尚志氏（株式会社カネカ）の「Production technology development of biodegradable polymer PHBH by recombinant microorganism」という4件の講演がありました。大学および企業からの講演ということで、基礎から応用まで大変生物工学らしい講演でした。また学生や研究員、教員による10件のoral presentationと16件のposter presentationがあり、幅広い研究分野の発表で活発な議論が英語を介して行われました。1日目の終わりに交流会、2日目の終わりに桜の花見が行われ、まさに「Sakura-Bio Meeting」にふさわしいシンポジウムになりました。シンポジウム参加者は約60名で、国際色豊かなシンポジウムが盛況に行われました。

留学生からは、他大学の外国人学生だけでなく日本人学生とも知り合うことができるとともに、英語でのシンポジウムで興味深い研究も多く大変貴重な経験になったという声もありました。来年も同じ時期に2020 Sakura-Bio Meetingを同じく名古屋大学で開催予定であります。ぜひ参加していただければ幸いです。



図2. シンポジウムの集合写真